



**大好きな伊勢のまちが
持続可能であるために。
明るい未来を切り拓く。**

令和6年6月 伊勢市議会定例会 市政レポート

市議会議員 谷口久美



私たちの大好きな伊勢を 守るために、 今、直視すべき2つの危機。

伊勢のまちの笑顔と持続可能な未来を守るため、私たちは今、目の前の課題と、将来確実に訪れる超高齢化という「2つの危機」から目を背けることはできません。

危機を乗り越えるには、前例にとらわれない
「今すぐの行動」が必要です。



危機①：足元の危機

中東情勢不安に伴う原油・物価の高騰が、市内事業者や市民生活、教育現場を直撃。



危機②：未来の危機

高齢化率44%
支えてが圧倒的に不足する
「大介護時代」の到来

悲鳴を上げる市内事業者に「ワンストップ窓口」を！

経営規模に関わらず駆け込める身近な相談体制が必要です。
「たらい回し」は最大の不安を招きます。迅速な支援の構築を！

動きの鈍い「現状維持」の姿勢

「三重県や商工団体に窓口は整備されている。市として新たに窓口を設置するのではなく、~~パイプ役としてつなぐ体制を継続する~~。聞き取りを続け検討していく。」

市民の努力成果:
生ごみ割合
33% →
27%へ減少!

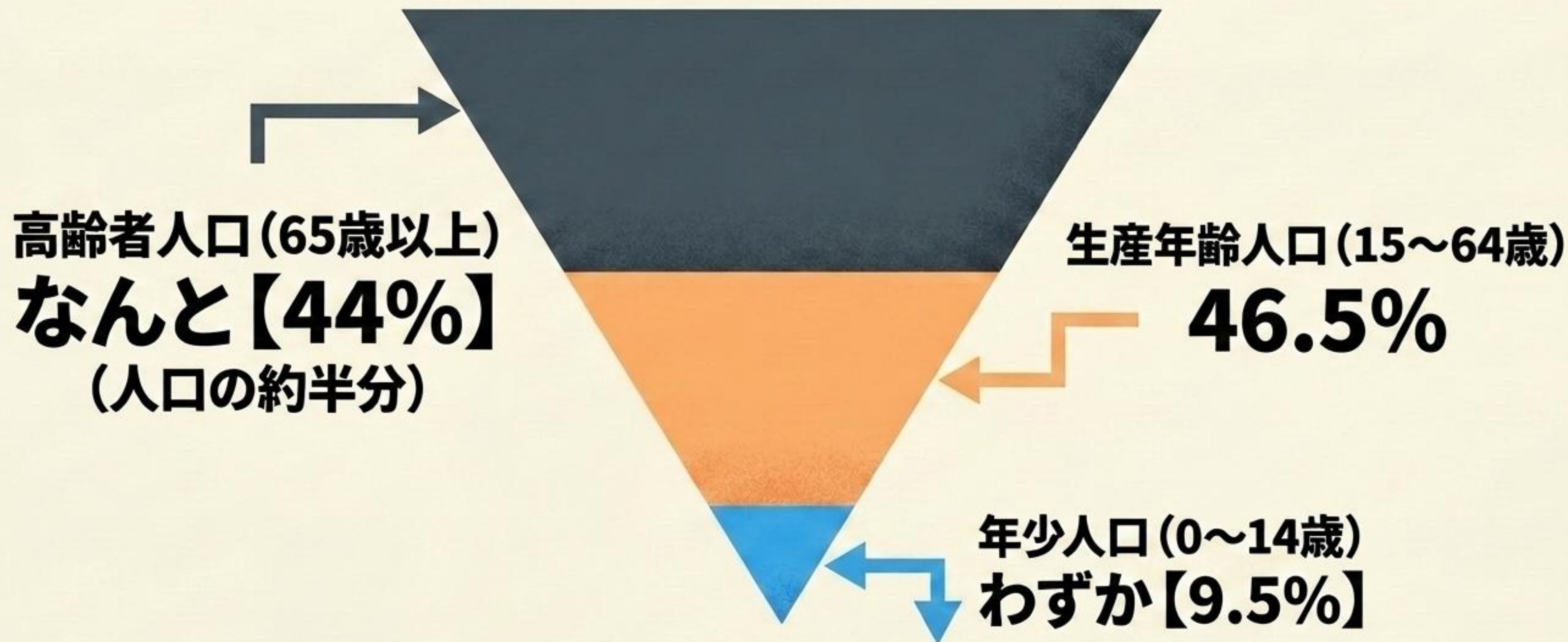
燃料高騰の今こそ、 市職員が率先する 「前例なき水切り徹底 キャンペーン」を！

市民の努力（27%への減少）に報いるためにも、行政が自ら行動変容の先頭に立つべきです。

これまでどおりの 「ルーティン」業務

「ホームページや動画配信、小学校への出前授業などで引き続き啓発に取り組みます。職員には情報提供で意識向上を図ります。」

直視すべき現実：2060年「超高齢化の崖」



現行のインフラ・福祉・市民サービスは、このままでは維持不可能です。



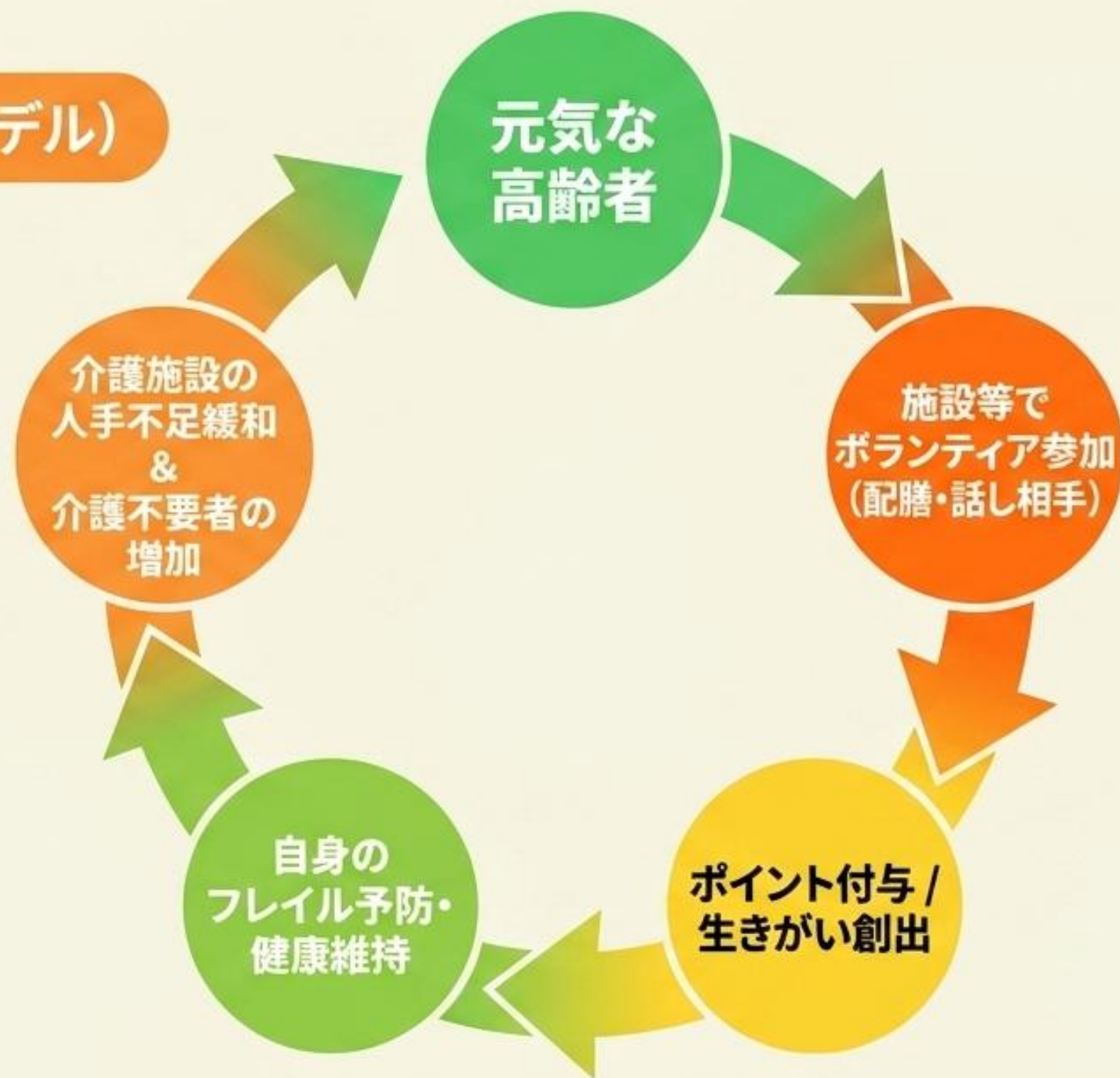
2040年には介護需要が
【1.1倍】に跳ね上がる

支え手である現役世代は、
2020年の69,000人から
2050年には41,000人へ
【約4割激減】

需要は増えるのに、担い手が消える。
今いる専門職だけでは絶対に支えきれない
未来がすぐそこまで来ています。

支えられる側から、支える側へ。一石三鳥の「Win-Winエコシステム」

介護支援ボランティア制度（稲城市モデル）



20年の歴史が証明する、劇的な成果（稲城市の実績）



新規介護認定の減少
(ボランティア活動による
健康維持がデータで裏付け)

年間 約

480万円

の純粋な費用利得



市の介護給付費の
劇的な抑制効果

伊勢市に当てはめても、確実な給付費抑制と高齢者の孤立防止が見込めます。今すぐ動くべきです！

立ちはだかる「前例と消極性」の壁



谷口の反論：既存の枠組みに固執している猶予はない！

[専門職不足の現実]: 現場が専門職を求めているのは当然です。
しかし、その専門職が激減する時代なのです！

[業務の切り出し]: だからこそ、専門資格が不要な業務（清掃や話し相手）
を元気な高齢者が担い、専門職が本来のケアに
専念できる環境を作る必要があります。

[挑戦の必要性]: 「難しい」を理由に11年前の結論を維持して、
高齢化率44%の未来をどう乗り切るつもりですか？

伊勢市の未来に対する姿勢のコントラスト

	行政当局（消極的・現状維持）	谷口 久美（未来志向・実行）
経済 対策	他の機関を紹介するパイプ役 状況把握し支援は検討する	市へワンストップの窓口設置 スピード感を持った対応と支援
ゴミ 削減	いつもどおりの啓発のみ	市職員率先の 前例なきキャンペーン
超高齢化 対策	現在の取り組みを継続	健康寿命延伸と社会参加のため 「高齢者の介護支援ボランティア」の導入を
市長の答弁 ／ 求める姿勢	「以前から人口予測して 地域での取り組みをしており、 それを継続していく。」	前例の壁を突き破る リーダーシップと不退転の決断！



「大好きな伊勢のまちが
持続可能であるために。
私は警鐘を鳴らし、
最前線で闘い続けます。」

従来と同じ枠組みを守るだけの行政では、市民を救えません。
伊勢市が直面する危機に真正面から向き合い、
前例の壁を突破する実行力が必要です。
市民の皆様がいつまでも笑顔で、安心して年を重ねられる
明るい未来を切り拓くために、谷口久美は
全力で頑張り抜きます。